

英語の学習・指導における

デジタル

ツールの

(機械翻訳や生成AI)

活用を考える



SEMINAR REPORT 2024

第1部：実践発表

機械翻訳を活用した英語学習・指導

— 大学での実践から中高大での学習・指導を考える —

発表：津久井 貴之（群馬大学）

ページ

進行：加藤 由美子（ベネッセ教育総合研究所）

1

第2部：討論

登壇・進行：酒井 英樹（信州大学）

登壇：金森 強（文教大学）

長沼 君主（東海大学）

津久井 貴之（群馬大学）

7

発表者・登壇者からのコメント セミナーを終えて

17

参加者の声 ～アンケートから～

18

| セ | ミ | ナ | ー | 開 | 会 | の | ご | 挨 | 拶 | 金森 強（文教大学）

本日の第2回ARCLEオンラインセミナーは「英語の学習・指導におけるデジタルツール（機械翻訳や生成AI）の活用を考える」と題し、皆さんと一緒に考える時間になればと思っています。学習に、生成AIや機械翻訳を使用することについては、様々なお考え、お悩みがあると思います。現段階におけるデジタルツールの活用は、従来の教育を置き換えた形が多く、やや限定的な印象があり、それを課題にも感じています。デジタルツールには、大きく分けると、能力の代替となる機能と学習支援の機能があるのではないかと認識しています。また、形成的な評価につながる機能も持ち合わせているとは思っており、それは、協働的な学びが起こる学習支援にかかわってくる部分でもあります。これからはその部分の研究がさらになされていくべきという意識を持っています。本日のセミナーでは、限定的ではありますが、デジタルツールの活用事例を実践研究からご紹介します。それを通して他の活用法の検討、学習者のLinguistic Knowledgeやスキルを伸ばすために、どこまで使い、どのように使えるか等を一緒に考え、今後のヒントを得る機会となれば幸いです。よろしくお願いいたします。

第1部：実践発表

機械翻訳を活用した 英語学習・指導

— 大学での実践から中高大での学習・指導を考える —

発表：津久井 貴之（群馬大学）

進行：加藤 由美子（ベネッセ教育総合研究所）

加藤：本日のプログラムの前半は、群馬大学の津久井貴之先生とベネッセ教育総合研究所とで進めた、機械翻訳を活用した大学生への英語指導の実践研究事例について発表します。後半の討論パートの話題提供という意味でもお聞きください。では、よろしくお願いします。



津久井先生：本研究は、学生たちの日常に、翻訳、添削、生成AIが、既に入り込んできている状況において、使い方への注意事項（Don'ts）が指導や授業内で周知されている一方で、実践者として、活用方法の積極的な周知や指導ができていくのかという課題意識のもとに始まりました。使ってはいけないもの、使わないように注意だけされるもの、あるいは課題が終わらない時にあわてて使うもの、というイメージがあるためか、学生自身が使うことへの「罪悪感」や「うしろめたさ」があるのではないかと感じています。

実践研究の全体像と前期の研究目的はこちらです（次頁図1-1）。本研究は、中高大での英語指導を見通し、中高での指導や実践に何か示唆を得られないかを考えながら、まずは大学生に対して、前期と後期にわたり実践を行いました。前期の研究目的は、「大学生の英語授業におけるデジタルツールの活用と意識の実態を把握し、ツール活用の利点と課題を明らかにする」です。できるだけ広く、どのように使われているのかというツール使用の実態を捉えた上で、英語で表現する力、表現することへの意欲を高め、抵抗感を減らすツールの活用、英語の指導や支援のヒントが得られないかと考えました。対象は、国立大学2年生21名。週1回の授業の中の25分間を使い、ライティング力の向上を目的としたタスクを行いました。タスクでは、どのようなデジタルツール（ChatGPTなどの生成AIも含む）を使ってもよいことにしました。学生たちが、どのツールを使うのか、使わないツールは何か、どのようなツールを使ってライティングタスクに取り組むのかをデータとして取得しました。また実践での取り組み内容や成果は、タスクを行う

授業科目の成績には含めないことや、個人情報保護、データ使用目的など、研究参加についての配慮事項を説明し、学生の上承を得て実践を開始しました。

様々なデータを取得しましたが、その1つとして、4月と7月にGTEC受検をしてもらい、プレとポストのスコア比較を行ったものがあります。ここでは、ライティングスコアが最も伸びた学生3名とツールの使用が特徴的だった学生1名の様子や意識について紹介したいと思います。上限が250であるライティングスコアにおいて、4月から7月の間に30以上のスコアの上昇があった学生を「最もスコアが伸びた学生」としました。

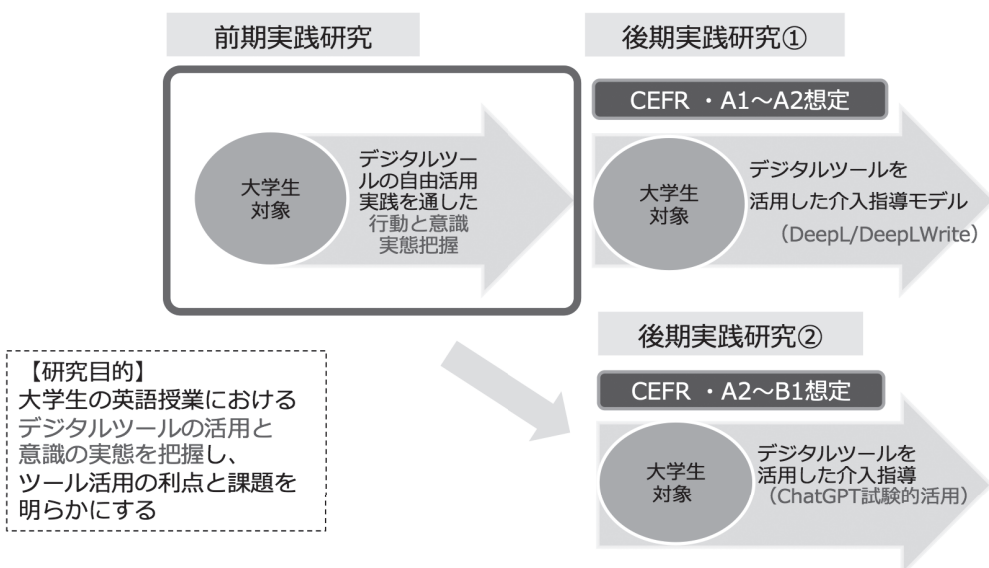
学生①は、スペルチェックとオンライン辞書を用いて単語の検索、例文の確認を頻繁に行っていました。英文添削は、自分で英文を書いた後に用いていました。この学生は、7月のポスト調査の自由記述では「添削機能かけられるようになってから、自分が過去にしたミスを再度しないように強く意識

するようになった」と回答しています。書いた英文の提出を毎回漏れなく行い、英語も書けていた学生ですが、時間内に終わらず、授業後に提出することが多かったです。ツールの使用は、ライティングタスクを終わらせるためというよりも、ツールを使いながら、表現や語彙を学んでいた様子がうかがえました。

次は学生②です。オンライン辞書を用いて単語の検索と例文の確認をし、後半の数回は、DeepL（翻訳ツール）も使っていました。コロケーションを意識することやツールを活用しながら学習することにこだわりがある学生です。7月のポスト調査の自由記述では、ツールの使用に関する意識や考えとして「使った後の活かし方が大切だと感じる。全部をうのみにしないこと、使ったらその表現を自分の身にするという思いで使うこと、使いすぎないことが大切だと感じる」と回答しています。この学生は、友人のDeepLの取り組み方を参考にしながら、他のツールも柔軟に活用していました。

図1-1

研究の全体像と前期実践研究の目的



学生③は、「便利な機能だと思うが、使い方には気をつけなければならないと思う。すべて日本語で書いてから翻訳にかけると何も身につかないが、分からない部分だけ調べるのならよいと思う」と回答しています。ツールに依存してしまう警戒心からか、最初から最後までツールの使用が限定的でした。また、「自分の言いたいことをどのように表現ができるのか知るためにDeepLを使用した」と回答しており、自力で書くことへのモチベーションが高かった学生です。

最後に学生④です。この学生は、他の学生より多様で柔軟な使用をしており、ライティングのスコアの伸びが、21名中で最も高くなりました。題材の情報収集はインターネットの検索機能を使い、DeepLを使った後にDeepL Write（添削支援ツール）で添削をしてもらい、さらに伝えたい内容とのずれを確認するために、DeepLを再度使って、逆翻訳（書いた英文の日本語訳を出すこと）していました。このDeepLの使い方は、高校時代から行っていたそうです。授業では、タスクの場面設定についての質問もしていました。

次は、デジタルツールの活用に否定的だった学生⑤の意識変化を紹介します。4月の時点でこの学生は、「機械翻訳は、英語を学習するのであれば、あまり使わない方がよいと思います。また機械翻訳に頼る時というのは、だいたい時間がない時なので、考えずにほとんどそのまま使っていました。反省しています」と回答していました。正しい英語を書きたい、でもツール使用に少し罪悪感があるところから、7月のポスト調査の自由記述には、「自分でよく考えた末にどうしても表現が思いつかない時、機械翻訳で調べて納得すると、むしろ頭に残りやすい」と回答しています。さらに、分からないことを気軽に聞けるメリットや、その便利さに気づき、補助的にツールを使うことや添削機能使用のよさを見つけていったことが自由記述か

らうかがえました。授業中はツールを自由に使い、学生同士でツールを使う様子を見せ合ったり、互いに話をしたりしていました。こうした教室内の雰囲気もよい影響を及ぼしていたのかもしれません。前期のツールの活用実態の紹介はここまでになります。

加藤：ありがとうございました。GTECスコアを大きく伸ばした学生や特徴的にツールを使った学生の事例などから、ツールの活用実態が見えました。この後は、前期の結果を受けて行ったライティング指導と結果、そして最後に、中高での実践に向けたお考えをご発表いただきます。

津久井先生：ここからは、後期に行った実践研究①について説明をします。学生のCEFRレベルはA1からA2程度で、使用ツールはDeepLとDeepL Writeです。本実践研究は、前期の実態把握から得たデータや知見をもとに、ツールを用いた指導モデルを考え、デジタルツールの機械翻訳と添削機能を使った指導をどのように行くと、まとまりのある英文を書くことへの抵抗感を減らし、ライティング力の向上に効果的か、を研究しました。課題意識として「翻訳・添削ツールを英語を学ばなくてもよい、楽をしてしまう、隠れて使うツールから、英語力を伸ばすために使う、英語使用の抵抗感を減らしてくれるツールとして、指導に組み込めないか」ということがありました。学生たちの英語力を考えると、残念ながら、英語のアウトプット自体があまりない、あるいはアウトプットしたものを伝え合ってもあまり伝わらないのではないかという不安を抱えているということがありました。私としては、何か一定レベルの成果物、まとまりのある英語の文章をプロダクトとしてでき上がる感覚を持ってもらいたい、そして、ツールを使ってできたライティングプロダクトが、自分のものであると感じてもらいたいと考えました。ツールの力を借りてコピー＆ペーストした英文ではなく、添削や修正をしながら、最終的に自分が

作ったプロダクトだというオーナーシップを持たせることができないかという願いがありました。対象は、1年生の学生26名。アンケート調査の回答では、英語学習が好きかという問いに「とても当てはまる」「まあ当てはまる」と回答した学生が0名、得意かという問いに「とても当てはまる」「まあ当てはまる」と回答した学生が0名という英語が苦手な学生の集団です。

前期の実態把握の成果も生かし、ライティングへの意欲とライティング力の向上を目指した、次の指導モデルを考えました(図1-2)。ライティングタスクは、週1回の90分授業と翌週の授業の前半45分間を使って全6タスクを設定し、実践しました。

ステップ1では、テーマに関するインプットを行います。トピックについて知っていることを教師が英語で促したり、日本語で補足したりしながらやり取りをします。例えば、あるタスクでは、宝くじの当たりくじが捨てられていたという英文を読み、その宝くじの当選金を得るのは、宝くじを買って捨てた人な

のか、拾った人なのか、宝くじを売った店のオーナーなのか、誰になると思うかについて話し合いました。

次にステップ2で、自分の考えについて自力で英文を書きます。ここでは、辞書機能とDeepLを辞書的に使う程度にとどめるようにガイダンスしながら、あくまで自力で書かせます。

ステップ3では、自力で書いたものをDeepL Writeで添削してもらって修正し、ステップ4では、修正した英文をDeepLに入れ、日本語訳を出します。この段階で、言いたいことと英文とのギャップを考え、英文を再修正します。そして、ステップ5では、内容や展開面に関することを中心に、学生同士でフィードバック(Peer Review)を行います。また、DeepLが出力した日本語訳を参照しながら、互いに気づいたことも伝え合います。

ステップ5まではプロセスライティングの手法を援用しながらツールを使い、ステップ6で最終校正を行い、ステップ7で英語で発表をし合います。最

図1-2

後期実践① (DeepL/DeepL Write活用指導モデル) _授業STEPとねらい			
1時間目 (90分)			
STEP	内容	詳細	実践者の課題認識やねらい
1	テーマに関するインプット (やり取り)	・ テーマについて教師が学生とやり取りを行う。 ・ ペアやグループで話し合う。 (英語で行い、その後日本語で補足的に)	背景知識の活性化や興味付けを行いたい。 教室で仲間と英語を学ぶ楽しさを味わってほしい。
2	Writing	・ 自力で書いてみる。 * 辞書機能 + DeepL (一部の日→英) を使用。	自力でアウトプットした英語 (書いた英文) から学ぶ機会を得られないか。
3	Reviewing 1	・ DeepL Writeの添削を受けて修正する。	添削された英語から学んだり、再度、表現の意図を確認したりする機会が得られないか。
4	Reviewing 2	・ DeepL (英→日) を使用し、言いたいこととのギャップを修正する。	母語をうまく活用できないか。
5	Reviewing 3	・ Reviewing 1・2で行ったことについて Peer (仲間) で共有・検討・FBし、修正する。	英語の表現やタスクの場面設定などへの「気づき」や学びが生まれないか。
2時間目 (45分)			
STEP	内容	詳細	実践者の課題認識やねらい
6	Final Edit	・ 発表に向けて最終原稿を完成させる。 * 辞書・DeepL・DeepL Writeを自由に使用。	“product” (一定のレベルの成果物としての英語) の感覚を持たせられないか。
7	Presentation / Speaking	・ 書いた内容について、ペアやグループ内で簡単に発表し合う。	“product”に対するオーナーシップを持たせたい。
8	Reflection	・ 振り返りに記入する。	次回のタスクへの課題や見通しを持たせたい。

後のステップ8では振り返りに記入します。書いて終わらずに発表までを行うステップ7を設定したことで、自分の書いた英語に対する責任感、オーナーシップ、満足感を高めることができたように思います。また、ツールに初めて触れる学生もいたので、このステップに沿った活動を進める前や活動中には、ツールのガイダンス、使い方の実演や一緒に使用する機会を設けました。

次に、教師の役割についてお話ししたいと思います。まず、すべてのペアのPeer Reviewの状況を把握できないので、気になったことはデジタルツール上にコメントを残すように学生に指示をしました。そして、残された履歴をたどりながら、内容面に対する形成的な評価をできるだけ英語でフィードバックしました。学習プロセスを把握し、学習途中の頑張りや気づいたことをフィードバックできるのは、デジタルツール（本実践ではGoogle DocumentやClassroomを使用）のよさといえます。また、学生の一人ひとりがこだわりを持って自

分の考えや気持ちを表現したのだから、表現や内容に対して、学生の実態を一番よく分かっている生身の英語教師が、反応することも大切です。英語表現に関するコメントや答えの例、ヒントや調べ方も示しました。関連する内容や問題点を話しているペア同士をマッチングし、内容や展開の点で参考になる英文と一緒に参照させたりもしました。活動が順調に進んでいるペアには、書いた英文を互いに言わせ、相手にうまく伝わらなかった部分等を確認させ、再度修正するように促しました。添削・翻訳ツールを使用している場合は、特に、何を伝えたいのか、表現したいのかを英文に絶えず戻って考えるように、声かけをしていくことが大切だと思います。ツールを使用し、「書いて終わり」ではなく、相手に伝えたり、感想を求めたり、質問を受けたりする言語活動、発表等を行いながら、「自分が書いた英文」に対する責任感、オーナーシップや満足感を高めていく際には、ツール任せではなく、教師の役割が重要になると感じています。

図1-3

後期実践①（DeepL/DeepL Write活用指導モデル）_中高での実践へ向けて

【23年度後期実践①で生かしたいところ】

- 全体の活動手順を示して、英語で表現することへの心理的ハードルを下げること。
- 導入・ウォーミングアップとして教師と生徒のやり取りや生徒同士の会話を行うこと。（書く内容に関する支援）
- 自力で書くステップから始めること。（+その後にはツールの使用・手助けを得られることを知っていること）
- 添削と日本語訳を使ったステップを取り入れること。
- ピア・レビューを行うこと。
- 教師が生徒の学びのプロセスをモニターし、適宜フィードバックやマッチングを行うこと。
- 最後（または終盤）のステップとしてスピーキングの活動を行うこと。（簡単な発表でもよいがマスト）

【24年度後期実践①で改善・検討が必要なところ】

- ゴールとなる言語活動に応じてライティングを取り入れる段階を変えること（話すこと〔発表〕の後に、ポスト・アクティビティとしてライティングをしてまとめる活動を入れる、など）。
- 母語の力を有効に活用すること。
- ライティングタスク自体の設定を検討すること（題材の難しさや「目・場・状」の設定の有無や度合いなどを考慮）。
- ツールの使い方に関するガイダンスをさらに丁寧に行うこと。
- ペアやグループの組み方を工夫すること。（英語の習熟やトピックへの興味・関心などを考慮する）
- ピア・レビューの観点を生徒に示すこと。

最後に、中学校、高校での実践に向けて考えられることをまとめました(前頁図1-3)。導入・ウォーミングアップとして、今回は日本語の補助も入れたインプット活動を行いました。書く作業に入った時に、書きたい内容がない、中身がない、考えがないという状況にならないよう、事前の支援は重要です。ツールを後で使用できること、助けてもらえることをあらかじめ生徒に伝えた上で、生徒が安心して自力で書くステップから始められるようにすることも大切だと思います。また、最後のステップとして、簡単な発表などのスピーキング活動を行うと、書いてそのまま終わりとならず、よいと思います。研究デザインやデータ分析へご助言をいただいた青山学院大学の高木亜希子先生からも、指導手順や活動モデルを構築する際に、最後のステップとして、発表する場面を設けることをご助言いただきました。今後も検討は必要ですが、中学校、高校の先生方と改善を続けながら、より学校現場のニーズに合ったツールを活用した授業改善につなげていけたらと考えています。以上です。

第2部：討論

登壇・進行：酒井 英樹（信州大学）

登壇：金森 強（文教大学）

長沼 君主（東海大学）

津久井 貴之（群馬大学）



酒井 英樹 先生

酒井先生：このパートでは、次の2つのテーマについて討論をしていきます。前半はテーマ1「機械翻訳・添削機能をどのように英語学習・指導に効果的に用いられるか」について討論をします。後半はテーマ2「機械翻訳の活用の先にあるChatGPTをどのように活用できるか」について、津久井先生から実践研究事例を報告していただいた後、討論につなげます。

テーマ1

機械翻訳・添削機能をどのように英語学習・指導に効果的に用いられるか

酒井先生：では、金森先生からよろしく申し上げます。

金森先生：津久井先生のご発表の中で、学生がツールを使うことへのうしろめたさを感じている、その真面目さに驚きつつ、これからはテクノロジーを自由に使える視点、アプローチがもっと生まれ、個別最適な学びができればよいと感じました。研究会等でツール活用の報告はありますが、「楽しんでいました。動機づけが高まりました。難しい文を

書けるようになりました」で終わっている場合が多く、Learning Outcomeに触れることまではできていないように思います。その意味で、今回の実践はとても丁寧ですし、学生が、自分の学びに対してのメタ認知をしていることが分かる点でよいと思います。また、語彙や文、文の構造を意識しながら学ぶ姿もみられました。より効果的にするために、1つ付け加えるとすれば、活動の最後のスピーチを行う際、他の学生から英語の質問を受ける場をつくとよいと思いました。質問に対して英語で答えることができない場合は、まだ内容や言語が自分のものになっておらず、本当のオーナーシップにつながっていない気がするからです。



金森 強 先生

酒井先生：ありがとうございます。長沼先生お願いします。

長沼先生：これまでARCLEでは様々なワークショップを行ってきましたが、学生の気持ちに寄り添った実践で、とても貴重に感じました。デジタルツールの活用は当たり前となってきたり、それに合わせてコミュニケーション観、能力観の捉え方が変わってきています。昔からライティング時に辞書の使用を許す・許さない、試験中の使用は基本



許さない等の議論はありました。しかし、現実世界では、大人も普通に使っていますし、学習途中でのデジタルツール活用は、現実的な活用能力が高まるのでよいと思います。また、デジタルツールの活用は、コミュニケーション能力の一部として、身体の延長として、捉えることもできるかもしれません。もしかしたら学生は、既にそのように考え始めているのに、教師の信念がなかなか変わらず、受け入れがたいのかもしれませんが、ただし、ツールを使用するための技術的な指導は必要です。Don'tsばかりを押しつけるよりは、使いすぎない視点を育てつつ、生産的な活用を伝えることが必要だと思います。自分の力を伸ばしたいという成長動機、自己実現的な達成動機を感じさせる明確なねらいを指導に入れていかないと、結果主義になり、プロセスの重要性を考える方向に向かわないと感じました。

今回は実験的にデザインされた指導ですが、ツールから得られるフィードバックと教師の介入がよい形でかみ合い、最終的によいプロダクトにつながったと思います。教師が介入をする際、どの場面で、どのようなタイミングでツールを使ったのか、そして、ツールからのフィードバックを自分の英文に反映させる上で、学生に向けて、津久井先生がされた介入の工夫等を教えていただきたいです。特にDeepL Writeは、求められる変更理由があり、なぜそれを受け入れるのかを考える必要がある機能を持っています。辞書でもそうですが、全部を排除せず、自分のものとしてフィードバック内容を選び、反映し、オーナーシップを持てるようにするために、どのような支援をされたのでしょうか。部分的なフォーカスではなく、大きなディスコースを

踏まえて修正をすることは、機械ではなかなか教えられない部分なので、教師やピアの役割が大きいと思いました。一方、教師からのフィードバックは、生徒が面倒に感じることもあります。大きな直しになると、回避方略が働き、もう1回書き直し、再提出するケースもあります。フィードバックを自分のものにするとは、自分のレベルに合った修正であり、自分でも書けそうだと感覚的に分かることではないかと思いました。

酒井先生：ありがとうございます。津久井先生お願いします。

津久井先生：ご質問を含めてありがとうございます。金森先生から学生の真面目さについてありましたが、これまで何度も使っては駄目、自力でと言われてきたので、ツールの使用は「悪」という言い方をしていた学生もいました。その一方で、高校時代からいろいろなツールを使っている学生もいました。教師から初めて使ってもよいと言われ、衝撃を受ける学生と、これまで幅広く使用してきた学生とが、混在していました。そう考えると、学生へのフィードバックや支援も、個々のニーズや抱えている課題に応じる必要があります。

実際には、提案方法とは違う方法や、自分なりの順番で使う学生もいました。ある意味、学生なりにツールを工夫して使おうとしているともいえるので、そのような学生への効果的なタイミングでの介入は悩ましかったです。生身の教師の役割としては、ツールから出された英文と学生自身の伝えたいことのギャップを、常に意識するよう声かけをしていく役割が大切であると感じました。

また、DeepL Writeから提案される修正候補には際限がないため、A1からA2レベルの学生は混乱をしたようです。「たくさん出すぎて混乱する。一番上をとにかく選ぶ」とアンケートの自由記述で答えている学生が多かったです。一方で、DeepL Writeから提案された候補の意味を調

べてから書き直していた学生は、時間がかかり、終わらない様子もみられました。英語の学習としてはよい学び方なので、どこまで授業の中で待つのかは難しかったです。全部のお答えになっていないと思いますが、以上です。

酒井先生：それぞれの視点からありがとうございます。私からは、ライティング活動以外でのツール活用についてお聞きしたいです。続いて、能力観の話もありましたが、新たな能力観を認めていくのか、いかないのかということについておうかがいしたいと思います。翻訳ソフト、添削機能等のツールを運用していく力は、ある意味その子自身の力とも思えます。Scaffoldingも含めた能力観に変わっていく必要があるのか、ないのかについて、お考えがありましたら、お聞きしたいです。それでは、まずは、ライティング活動以外でのツール活用について、いかがでしょうか。

金森先生：まとまった英文を書くことに苦手意識がある学生には、リーディング活動等の受信活動を豊かにしないと発信にいき着かないと、アドバイスをしています。例えば、「日本は世界の平和と連帯のために何をすべきか」を、ChatGPTを使い、英訳をするとWhat should Japan do for world peace and solidarity?と出力されました。さらにDeepL Writeに修正してもらおうと、一般、ビジネス、学術・技術、カジュアルに分けた別の文が出力され、学生はいろいろな語句や表現を知ることができます。ライティング活動につながるリーディング活動として捉えて取り組むことで、語彙の定着や文構造の意識へとつながります。

長沼先生：どうしても書き言葉を中心としたツールや技術が気になりますが、GIGAスクール構想に基づいた小学校や中学校の現状をみると、特に小学校では音声を中心とした動画撮影などのデジタル活用が多いです。津久井先生の実践でよいのは、やり取りから入っていることです。スピー

キングで始まり、スピーキングで終わり、文字に音声を乗せている点に工夫を感じます。間接的ではありますが、それがスピーキング指導につながっているのだと思います。またChatGPT等の生成AIをどのようにスピーキングに活用できるか、書き言葉の音声化、口語と文語のスタイルの違い等を、今後は意識していく必要があります。書いたものを単に読み上げても、オーディエンスに言葉は届かず、独りよがりのスピーキングになることもあります。ツールを使用した後、そこからできた自分の言葉からの乖離^{かいり}や違和感を、自分の言葉に戻したいと思う動機づけは大事です。その時、ライティングよりスピーキングの方が気持ちは乗りやすく、オーディエンスを意識しやすくなるので、他の技能と連動させながら、気持ちを育てていけたらよいと思います。

津久井先生：私も同感です。トピックが「昨日食べたもの」であれば話せますが、例えば「世界の平和に対する日本の貢献」では、情報もなく、言いたいことが浮かばない学生もいます。本実践では大学で使用しているテキストを用いましたが、難易度が高く、読み切れないところもあったので、活動の最初に日本語での補助も加えたやり取りを入れました。また、自分が書いたものにオーナーシップを持てるように、活動の最後に発表の時間と発表内容への質問を受ける場を設けました。DeepLから出力された英文を読み、意味を調べ、書き直すところまではできたけれど、発表内容への質問の意味が分からず、うまく答えられない学生もいました。ツールの活用と併せ、話す活動も入れていく大切さを感じました。

酒井先生：自分の言いたいことを確保しながら、インプットの機会もしっかり確保していくことで、活用がうまくなされていくのかもしれませんが。2つ目の能力観に関してはいかがでしょうか。

長沼先生：評価の公平性の問題などと並行して

考えなければいけません。学びに関するプロセス評価、形成的評価を行う上で真正性を意識させ、目的・場面・状況における使用能力、本物らしい場面での活用能力に関してフィードバックしていくことは重要です。テストングにおける自動採点の技術は進んでおり、信頼性は高く、安定性もあるため、機械が強い部分は任せながら人の能力を活かし、ディスコースを踏まえた想いや意図の伝わり方、課題達成度合い等は人間が評価していくのがよいのかもしれません。生成AIによって代替されてくる部分も増えますが、AIとの役割分担ができてくると、人間がどのように評価にかかわっていくかを考えていけるとと思います。

酒井先生：形成的評価、真正性、ツールの活用力も含めたパフォーマンス評価、能力のルーブリックを作成し、個別の能力を見ることを考えていくことは可能だと思いました。

ではテーマ2に移ります。最初に、津久井先生から実践を報告していただき、その後、討論をした

いと思います。よろしくお願いします。

テーマ2

機械翻訳の活用の先にある ChatGPTをどのように活用できるか

津久井先生：試験的な活用になりますが、ChatGPTを使った介入指導を試行した、後期の実践研究②について紹介します(図2-1)。対象は、比較的英語が得意なCEFRがA2からB1レベルの学生になります。課題認識は、学習支援ツールとして生成AIを使う授業、指導手順が考えられないかです。ChatGPTは、教師の教材準備等では効率的に使われていますが、学習者自身を支援するツールとしても使えないかという試行実践になります。ChatGPTから得られる英語の表現のフィードバックと修正英文のアウトプット以外に、何かを得ることはできないかと考えました。そこで、目的や場面、状況に沿ったライティングができているか、

図2-1

後期実践② (ChatGPT試験的活用) 課題認識と授業概要

1) 課題認識

生成AIを（教師の業務軽減ではなく）学習者の学習支援ツールとして学習者自身が使う授業、指導手順が考えられないか。

- ・ ChatGPTの英語の表現のフィードバックと修正英文のアウトプットは当たり前。
「思・判・表」へのフィードバックと修正英文が得られないか。ある程度得られれば、**個別の英文を基に自分の英文の課題に応じた「思・判・表」の学習（育成）支援になるのではないか？**

2) 対象：国立大学2年生23名（比較的英語が得意なクラス：CEFR A2～B1想定）

3) ライティングへの意欲とライティング力向上を目的とした指導介入タスク（週1回の授業内の40分を活用）

＊期初にオリエンテーションを実施

＊ChatGPTを活用した授業

- ①使用教材 CNN English Express+ TED talks ②「目的・場面・状況」のある1タスク（40～50分）×6タスク

4) 取得データ

- ①アンケート+自由記述（ブレ・毎授業後・ポスト） ②GTECSコア（ブレ・ポスト）

- ③ライティング課題（ブレ・ポストで同テーマ）

＊対象学生には、プライバシーおよび個人情報の厳重な保護に加えて、取得データ①～③の内容は該当科目の成績に無関係であることなど、研究参加に係る配慮事項について十分に説明し、研究参加の承諾を得た。

「思考・判断・表現」の学習(育成)支援に使えないだろうか、という考えに至りました。

実践は、週1回の授業内の40分間を活用し、大学2年生23名に対して、ChatGPTを使って行いました(図2-2)。プロセスライティングに沿う形で、インタラクションを行った後、学生は自力で英文を書き、Reviewingをしました。

Reviewing1では、ChatGPTからの言語面のフィードバック(単語・表現・状況に合っているか)を受けて、修正をしました。その後、Reviewing2では、ChatGPTにタスクの条件に合っているのかの評価や、タスクの条件にふさわしい修正モデル英文を得るプロンプトを入れ、目的・場面・状況に合っているかという内容面についてのフィードバックを受けました。

また、Reviewing2では、Peer Reviewとして、ペアで共有と検討、フィードバックをし合い、修正につなげました。最後のFinal Editでは、自力(1人)で英文を仕上げ、オーナーシップを高めました。短

い時間での実践でしたので、発表のSTEPを設定できませんでしたが、それ以外は実践①とほぼ同じ流れにしています。プロンプトの見直しや改善点はありますが、この図は、ChatGPTにプロンプトを入れる流れを示したものです(次頁図2-3)。

出力される内容は毎回異なるので、それらを踏まえてPeer Reviewを行うことの大切さを改めて感じました。これまでChatGPTを使ったことのない学生が多かったので、ChatGPTの出力内容のすべてが正解ではなく、必要ならさらにやり取りをしたり、他のツールで調べたりすることの必要性を繰り返し伝えました。さらにPeer Reviewでは、互いの英文を読み合い、ChatGPTとのやり取りで気づいたこと、違和感を覚えたこと等を共有し合うよう、促しました。こうしたツールの精度は今後さらに上がっていくでしょうから、ツール任せにならないように、学習者のやり取りの様子や書いた英文を見ていく必要があるように思います。「ペアのパートナー以外にもう1人意見を述べてくれる人(Chat

図2-2

後期実践② (ChatGPT試験的活用) _授業STEPとねらい

STEP	内容	詳細	実践者の課題認識やねらい
1	家庭学習	・ CNNやTED talksを視聴してくる。	映像教材なので映像視聴は家庭学習。
2	Interaction	・ 視聴内容に関してペアやグループで話し合う。	高度な時事問題を扱っているため、背景知識の活性化やウォーミングアップを行う。
3	Writing	・ 自力で書いてみる。	自分が書いたものへのフィードバックになるように、また、自分の力のモニターになるようにしたい。
4	Reviewing 1 【Prompt 1】 【Prompt 2】	・ ChatGPTのFB(単語・表現・文法へ)を受けて修正する。	英語の基本的な誤りをクリアにしたうえで、「目的や場面、状況」について考えられるようにさせたい。
5	Reviewing 2 【Prompt 3】	・ ChatGPTのFB(目的・場面・状況に合っているか)を受けて修正する。プロンプトは授業者が提示。 ①タスクの条件にあっているかの評価を得る ②タスクの条件にふさわしい、学生の英文を修正したモデル英文を得る	ChatGPTとのやり取りから「目的・場面・状況」への理解や意識が高まるのではないかと、自分の書いたものに対するフィードバックをきっかけに考えさせたい。
6	Reviewing 3	・ Reviewing 1・2で行ったことについてPeer(仲間)で共有・検討・FBし、修正する。	process writingやピア・フィードバックで、英語の表現や「目・場・状」への理解が深まるか？
7	Final Edit	・ 内容、言語の両面における最終原稿を完成する ChatGPTを自由に使用する	最後は自力(1人)で仕上げることで、オーナーシップを高めたい。
8	Reflection	振り返りに記入する	主にReviewingを振り返らせたい。

GPT)がいる」という程度に受け止めて、活動していくことが大事だと思います。

また、ChatGPTを使い、書いた英文の目的・場面・状況などに関する適切さ以外に、英語面に関するフィードバックも得ました。ただ、プロンプトの入れ方やその後のChatGPTとのやり取りの問題かもしれませんが、語彙や文法のレベルが難しくなりすぎていることにストレスを感じていた学生もいました。

授業での教師からのフィードバックは、数名の学生の代表的な事例を取り上げるか、その典型例を教師が書き直したものなどを示して行うことが多かったと思います。しかし、ChatGPTを使えば、精度の問題はあっても、毎回自分の書いた英文に対しての目的・場面・状況へのフィードバックをもらえたのでよかった、面白かったという感想が多く寄せられたことが、印象的でした。

次に、本実践終了後の学生からの感想を自由記述から紹介します。「自力で英語を書く力が上

がったと思いますか」というアンケート調査に対し、「そう思う」と答えた学生が、「確実に自分で英語を書くためらいは減った」「文章の構成や目的・場面・状況を意識させられたからです」と答えています。逆に、「単純に英語の表現の豊かさを永久的なものとして獲得できたのか」というと微妙「ChatGPTの表現を見て、確かにそのような表現はできるな」と思い、それで修正をするが、時間が経つとその表現を忘れてしまっている」と、冷静に自力で英語を書く力は、それほど変わっていないと回答した学生もいます。

実践の振り返りとしては、ChatGPTと一緒に考える相手としての役割を持ち、目的・場面・状況への意識を高める効果はあったと思います。自由度が高いツールなので、どのようなガイダンスをするとよいか、使える場面や、どのレベルの学習者に有効かについては、今後も研究が必要であると感じました。また、ChatGPTに入れるプロンプトの精度によって出力が異なるので、教師が、学生・生徒た

図2-3

後期実践② (ChatGPT試験的活用) _Reviewing 2 のプロンプト

<タスクの条件や目的・場面・状況などに関するプロンプト例>

#	Prompt
Prompt #1	* 群大に來ている留學生は6ヶ月の學修を終え、來春からはALTとして前橋市で働く予定である。ALTとして生徒たちと視聴するのによい、あなたのお気に入りの洋画を紹介するタスクについて指示を出した。実際は、英語でやり取りを行うので、英語の説明や教師の問いかけをそのままプロンプトとして入れる形にした。
Prompt #2	* ロールを与えて、英文をペーストさせる。そのうえで、1) 英語の文法や語彙の正しさ・適切さについてのフィードバックのリストを提示するよう指示する。2) そのフィードバックを反映させたRevised Version 1もフィードバックするよう指示する。CEFRレベルは学生が出てきた英文に応じて再調整する。
Prompt #3	【実際のプロンプト】 次に、以下の3つの条件から英文を分析し、そのフィードバックを日本語で、リストにしてください。英文の具体的な部分に言及して分かりやすく説明してください。 条件1) Ms. Blanchettの置かれた状況やライティングの目的・場面に照らして、彼女に宛てた紹介文として適切か。このライティングの目的・場面：この紹介文はMs. Blanchett が読む。彼女はこの春にALTになる。その彼女が生徒たちの好きな映画を知ること、ALTになった後の英語の授業に役に立つ。これらの点を考慮してフィードバックをください。 条件2) 読み手が映画を見てみたくなるような紹介文の展開や構成の工夫があるか、フィードバックをください。 条件3) cohesionやcoherenceは適切か、フィードバックをください。 英文：[ここに英文をペースト]
Prompt #4	* ここまでの全てのフィードバックを基に[Revised Version 2]に校正するよう指示する。出力される英語のレベルは学生が随時調整する。

ちの習熟レベルと実態を理解している必要があります。加えて、タスク設定が曖昧だとプロンプトも曖昧になり、結果として不適切な個別フィードバックが起こるので、言語活動やタスク設定の重要性を痛感しました。結果的には教師の側も改めて、言語活動の質を意識することにつながったといえるかもしれません。さらに、ツール使用の前後での教師の支援や、事前・事後の活動はとても重要であると考えます。最初にインプットのなやり取りをし、最後に発表やインタラクションを行うのは、1つの方法だと思います。単元や指導の手順、言語活動、活動の前後の支援や手順など、「授業をデザインする力」は今後ますます重要になると思いました。

最後に、ツール活用の効果や教師の役割をまとめます。ツール活用の効果としては、①英語で表現することの抵抗感やためらいが軽減される可能性がある。②誰か（教師や他の学生・生徒）のモデルをもとに、モデルにある課題やよい点を参考にするのではなく、自分の書いた英文（の課題やよい点）から学ぶことができる。教師の役割としては、①自分がつくった英語という意識。②単元や指導の手順、言語活動やその前後の支援をデザインする力。以上です。

酒井先生：それでは順番に、テーマ2「機械翻訳の活用の先にあるChatGPTをどのように活用できるか」についてご意見をうかがいたいと思います。

長沼先生：ChatGPTを活用した非常に意欲的な実践研究のご紹介をありがとうございました。生成AIの柔軟な活用が高まる中、デジタルツールを活用した介入指導について考えることができ、よかったです。能力の代替としての役割や、学習支援等の役割があるツールをどのように生かしていくかですが、ChatGPTなどの生成AIは、アドバイスが非常にうまいとされています。限られた授業時間の中で、先生に質問することに遠慮や難しさを感じる学生・生徒にとっては、ずっと付き合ってくれる、

カウンセリングやコーチング的な役割を果たしてくれます。しかもネット上にある様々なテンプレートを活用することで、教師も知らないテクニックを使ったよい学びが得られることもありえます。ChatGPTから出力される毎回異なるフィードバックが混乱を招いたり、逆にそれを無批判に受け入れたりする学生・生徒もいるかもしれません。しかし、英語のレベルが上がるにつれて、その異なるフィードバックが、多様な選択肢へのアドバイスになり、よいフィードバックとして受け止められ、よりよい方略を判断して考えるきっかけとなり、プロダクトの改善につながるようにも思います。この異なるフィードバックがどのような活用につながると、津久井先生が実践の中で感じられたか、気になりました。

もう1点は、生成AIは、アドバイジング、コーチングに加え、コミュニケーションの相手になるという強みを持っています。テストの世界において自動採点の技術は上がり、発表型のアウトプットへのフィードバックは強いですが、やり取り型のアウトプットに対してはシミュレーションになりがちで、まだ難しいようです。例えば、自分が書いたものに対する返信メールから、伝えたかったことが相手に伝わったかどうかに分かることがあります。変な英文を書いた場合、こちらが意図したものと違う反応がChatGPTから返ってくることもあります。生成AIをコミュニケーションの相手としてどのように捉えるかは、今後も検討が必要でしょう。また、学習者の能力レベルとChatGPTに指示をして出力させるレベルとがうまく合っていない場合もありますし、ChatGPTがCEFRの能力観を理解しているかどうかとも判断しづらいです。ChatGPTなりの工夫をしてくれますが、教師が捉える能力観、レベルの感覚を、教師から学生・生徒に伝えるだけでも使いやすくなると思いました。

金森先生：最近発表されたOECDからのレポートに、15歳の学習者がどのように英語を学んでいく

のかが、フィンランド、ギリシャ、イスラエル、オランダ、ポルトガルのケーススタディと併せて紹介されています。レポートの第2章には、デジタルツールを使った教育に関する調査があり、ChatGPTのことも書かれていました。また、ChatGPTが言語教育や研究に与える影響に関してまとめた Wilson Hong氏の論文に、Personal Language Tutorという表現がありました。夜中でもどこでも丁寧に対応してくれ、何度も答えてくれるChatGPT。人間では無理であり、そのように考えると、使えた方がよいツールです。学生には、多くを信頼しては駄目、友だちレベルという意味合いで、「ChatGPTくん」、「チャッピー」と呼んでいます。情報量は多く、幅広くいろいろなことを知っていて、チューターとしてはありがたい存在です。人間同士でのやり取りを大切にしつつも、友だちとの協働学習と同様に捉えて、ChatGPTにScaffoldingしてもらったり、Peer Reviewしてもらったりしてよいと思います。

先ほどのWhat should Japan do for world peace and solidarity? の回答をChatGPTに400語以内で出力することを指示すると、400語で内容のある文にしてくれます。これはリーディング題材としても使え、読むことで、世界の平和の連帯のためにどのようなことを日本はすべきなのか、どのような内容を意識すべきなのか分かり、学生の発信活動につながっていきます。使い方はいろいろあります。語数やCEFRのレベルを指定すれば、それに合わせた書き直しもしてくれます。この便利なツールを使わない手はないです。また、反転授業のような形で、学生が自分のやり方で家庭で学んだことを教室に持ち寄り、やり取りやスピーチをしながら内容を深めることもできます。ChatGPTの活用などを含めた授業や家庭学習を設計し、学習内容を深めることは、教師がいないとできません。これから、効果的な学びが生まれるいろいろな活用方法が生まれてくるのではない

かと期待しています。

津久井先生：毎回異なるChatGPTの出力を、学生はどのように捉えていたかに関して、長沼先生から質問がありました。授業観察から、話し相手としてChatGPTが面白くなり、やり取りを重ねている感じがうかがえました。毎回異なる出力になることを、好意的に受け止めている学生が多かったと思います。その半面、際限なく続けることができるので、授業内で最終的に自分の英文を書き終えることができず、ChatGPTとのやり取りに時間を費やしてしまう学生もいました。

学生の英語レベルとChatGPTの出力レベルは、タスクを進めながら、レベル感が合うように調整をしました。大学2年生が対象だったこともあり、学生たちは自分の英文ライティングのレベルが何となく分かっていたため、プロンプトではB1レベルの出力を指示するように言われているが、もう少し簡単な英語にしたいなどと、納得できそうなレベル感に各自調整をしていました。

酒井先生：学習者は、正解を得るためにChatGPTを使用するというよりは、自分で何かを判断するための情報源、あるいはコミュニケーションの相手として、ChatGPTを活用する力を育てていく必要があると思いました。

最後に、この討論を通してChatGPTや機械翻訳、添削機能について、中学・高校の先生方に向けてメッセージがありましたら、お願いします。

津久井先生：指導設計、能力観、教師の役割等については、改めて考える必要があると感じています。今までは、ある意味、止められるレベルのテクノロジーでした。電子辞書は持ち込ませない等ができましたが、オンラインツールはタブレットが手元にあるので、それは通用しません。楽をするためではなく、よい使い方を理解している学習者もいるはずです。また、教室に生徒が集まって学び合う意味がある授業、価値があるツールの使い方が

できるように、授業や活動を考える必要があります。実践研究①は、A1からA2レベルの英語が苦手な学生たちでも、「自分が思っていることが相手に伝わっているか」には、こだわっていました。ペアワーク中は、互いの英語がうまく伝わらない場面もあったようですが、ここだけは分かってほしいという自分の考えを、粘り強く伝えようとしていた姿が印象的でした。そのような場面で、教師がうまくアシストしていけばよいと思いました。

長沼先生：津久井先生が今、一番根幹となるところを言うてくださったと思います。付け加えるとなると、CEFRではCAN-DOとして、言語活動や言語能力に方略能力も含まれています。2018年に出されたCEFRのCompanion Volumeでは、ツールの使い方、方略等にも触れられており、能力の一部として、従来の学習方略の考え方を変えていかなければとも思います。教室は、自律学習へとつながっていく場でありたいです。特に高校は、学習指導要領における学びに向かう力の目標が、主体から自律へと移っていく時です。教師は学び方を学ぶ場面をつくり、ストラテジーをうまく使えるようにする指導、また、教室をコミュニケーション場面としてデザインし、生涯学習や自律学習へとつなぐ介入を意識していきたいです。

その意味では、前期の実践では学び方やツールの使い方の多様性、意図的な使い方がだんだんと増え、グッドラーナーになっていく様子がみられました。限定的な使い方や目先のものに飛びつく様子がみられ始めた時に、教師は使える技を示すだけでなく、レベルに合わせたストラテジー指導が必要です。その際は、ストラテジーや信念の押しつけにならないように意識して、活動をデザインしていくことが重要だと思います。学習者の信念と教師の信念が相互にうまく活性化し、ストラテジーの使い方が共有されていけばよいと思います。

方略の指導にあたっては、学習スタイルとの関

係も大事です。自分の学習スタイルとの違いを感じても、ツールを使ってみたら新たな世界が広がることもあります。苦手意識が、肯定的なものへと変わるきっかけにもなります。ツールを使うことの価値を伝えていくことも、教師の役割の1つです。スタイルに合わせた指導をしながら、学習者の可能性を広げていけたらと思います。

金森先生：教育委員会やセンター等で、教師へのデジタルツール使用に関する研修が十分でないことが気になります。先ほど紹介したOECDのレポートにも、そこを充実させないとうまくいかないであろうと書かれてありました。コロナ禍を経て、離れた場所にいる学生と簡単につながり、手軽に話ができるなど、隙間時間を使った対話が容易になりました。しかし、冷静に考えると、この何年間で学生との距離は遠くなった気がします。ツールを使うよさはあると思いますが、教室での学び合いは変わらずに大切にしたいところです。分からないツールの使い方は、誰かのまねをしながら少しずつ広げ、それぞれの先生方から素晴らしい実践が生まれてくれればよいなと思いました。

酒井先生：英語を学ぶ時に、すべてを機械翻訳や添削機能等に頼り、そのまま発信していくだけでは、自分の力にはなりません。言いたいことをしっかり捉え、まずは自分の力で書くことからスタートし、その後にツールを効果的に運用し、書いたものをしっかり相手に伝えていく。それが、自分の言葉にしていけるプロセスであり、オーナーシップへつながるということの重要性を改めて感じました。

ベネッセ教育総合研究所の高校3年生の英語学習に関する調査(注)で、高校3年生の中に、「英語を使う力を高める学習方法がわからない」と回答した生徒が61%もありました。津久井先生の実践発表を踏まえると、機械翻訳、添削機能、ChatGPT等のデジタルツールを使う際には、使わせるのではなく、使い方を皆で模索し、共有する

作業がとても大切だと感じました。また、各自が身につけたい英語力、能力観を把握し、学習に向かう目標と擦り合わせながら、学習者と指導者が共に考えていくことの大切さを改めて感じました。機械翻訳は言語表現に着目した学習になりがちですが、ChatGPTには思考力、判断力、表現力等を提供する側面、パーソナルチューター、ランゲージチューター、そして、コミュニケーション相手としての機能があります。また皆さんと議論を深めていけたらと思います。今日ご参加いただき、ありがとうございました。

加藤：先生方がご自身の実践を考える材料を、何か1つでも手にされていることを願ひまして、本日の会を閉会とさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。

注：https://berd.benesse.jp/up_images/research/kousaneigo2021.pdf

発表者・登壇者からのコメント

セミナーを終えて

金森 強 (文教大学)

今回のセミナーでは、「機械翻訳ソフトや生成AIを用いることへの罪悪感がある」という学習者がいることが一番の驚きであった。課題を完成させるためには、各ツールが持つ機能や情報をフルに活用して効果的・効率的な学びができていれば、「スーパーパーソナルランゲージチューター」として、個別最適な学びを充実させる最強のパートナーになるはずである。友だちとのペア・グループ活動等と同様、すべてを信じてはいけないのだろうが、AI君や翻訳ソフトさんと一緒に、自身の英語能力を高める学習方法を模索し、多様で多量の英語に触れたり表現したりする機会を持つことができれば、その意義は大きいはずである。指導が必要となる段階もあるだろうが、最終的には、学習者自身が学び／目的に応じたツール選びから、使い方を決めることが望ましいはずである。

酒井 英樹 (信州大学)

今回の実践研究や討論を通して、学びにつながるデジタルツール(機械翻訳や生成AIなど)の活用の可能性を改めて実感することができました。津久井先生の実践ではライティングの指導に焦点を当てていましたが、話すこと[やり取り]の指導でもデジタルツールを活用することができるでしょう。英語でやり取りをした後、言いたかったけれど言えなかったことをデジタルツールで調べてからもう一度言語活動を繰り返せば、「知識及び技能」の学びにつながると思います。また、場面に応じた表現方法について調べたり、自分が発したコメントや応答などの適切さをデジタルツールで確認したりすることによって、「思考力、判断力、表現力等」に関する学びも可能かもしれません。学びにつながるデジタルツールの活用に関する実践が、幅広く行われることを期待します。

長沼 君主 (東海大学)

生成AIにより様々な学習の可能性が開かれたが、その危険性に注意が向く中、課題を到達する上でのストラテジーの一部としての生産的な活用が望まれる。学習者がよい意味で罪悪感を覚えることは、道具の過度な使用にならず、依存し過ぎないためにも、よい意識ともいえる。評価が結果志向的になってしまうと、ともすると、安易な道具の使用に陥ってしまう。学びのプロセスを重視し、プロフィシエンシーを育てるアプローチへと転換していく上で、現状の自分の力で次に道具なしでも達成できそうな程度の利用にとどめるためのモニタリングが重要であり、また、産出されたプロダクトへのオーナーシップを感じられるかが問われる。現実社会ではこうした道具を活用しながら課題に取り組んでおり、道具を自分の能力の延長としてとらえる能力観の変容が、学習者とともに教師にも求められるだろう。

津久井 貴之 (群馬大学)

「タブレット端末導入によるICTツールの活用」は、学校現場にこれまで問われてきた「ないものをねだるのではなく、あるもので工夫できるか」ではなく、「あるものをどう活用できるか」が問われている、新しいタイプの課題だと思います。教師が生徒たちにすべて教えてあげるというマインドセットを捨て、一緒にツールの使い方も工夫していく。そして、時に生徒の提案も受け入れて実践してみる。そう考えれば、授業づくりに生徒たちがより深くかかわるきっかけになるのではないのでしょうか。また、ICTツールの活用の波は、私自身も生身の英語教師の役割を改めて問い直すきっかけになりました。「私が、私の生徒・学生たちと、私たちの教室で英語を学ぶ、英語を通して何かを学ぶ」意味や価値は何か。この答えを英語教育にかかわる先生方と共に考えていきたいと思います。

参 加 者 の 声

～アンケートから～

中学校教員・中高一貫校教員

- ◎自動翻訳などが発達する中で、子どもたちに「なぜ英語を勉強しなければならないのか?」と問われることが増えました。その問いに対するヒントとなりました。子どもたちのどのような力を伸ばしていけばよいのか勉強になりました。
- ◎英語も言葉であるため、AIの力を借りながらも、最後は生徒自身の言葉で語らせることが大切であること。

高校教員

- ◎生徒たちに課題を与える時に、より生徒たちが自分事として思考・判断・表現しなければオーナーシップを持ってない。手段と目的を分け、生徒たちが自分たちで考え、自分の口から表現したくなるような仕かけが必要だと感じた。
- ◎ChatGPTを活用する際に、英語学習者の英語レベルにどのように設定を合わせていくのかという点についてしっかり考えたいと感じた。
- ◎これまで、機械翻訳、添削機能、ChatGPTへの理解が足りず、これらの使用に消極的であったが、今回、実例をうかがうことができ、活用方法や効用なども知ることができ、これから積極的に使っていきたいと考えています。
- ◎「パーソナルチューター」というキーワード。高校生の英語学習者の多くが「どのように英語を勉強すればよいのか分からない」と答えている背景は一体何なのかを考えなければならないと感じた。現場教員が学習方略について研鑽を深めることがますます求められると感じている。

教育行政関係

- ◎生成AIや翻訳機、ChatGPTを使って自分が教えたことも学んだこともないため、未知の部分がとても大きい。未知であるため、それを効果的に活用できる自信や見通しがなく、結果、使うことを恐れたり避けたりしてしまっている。しかし、これからの時代を生きる子どもたちを育てるには、こちらの都合で「何をどう学ぶか」を限定するのは間違っている。「何をどう学ぶか」を決めるのはあくまで子どもたち自身であり、私たちは学びのコーディネートとサポートをする、そして、様々なツールは、正解としてあるわけではなく、子どもたちが気づき、学ぶためのきっかけやヒントを与えてくれる存在であるというように、こちら側が、指導観、能力観、授業観など様々な価値観を変える必要を強く感じた。
- ◎公立の中3生が翻訳ソフトを活用したライティングの授業を参観したことがある。デジタルツールを活用したことは同じだが、目的・場面・状況の設定が曖昧なままであったこと、これまでにツール活用の蓄積がなかったことで、生徒がその便利さを実感して有効に使っていたとはいえなかった。今日の津久井先生の報告から、ツールを使いこなすこと自体に生徒が慣れており、目的達成のために必要なツールを自分が選んで使えるまでにスキルが身についていたように思う。とりわけ、生徒の意識の変容や教師の役割、かわり方は大変興味深かった。最終的に、ライティングの内容について自分の言葉で語ることができ、聞き手の質問や感想に対して答えられるようになることが大切であるという議論にも、大変共感した。

学生

- ◎「教室でみんなで集まってやるのに価値のあること」を考える、「言語活動のデザイン力」がますます教師に求められるということ。

研究機関

- ◎学生にデジタルツールを上手に使わせることと、心構えにより、英語スキルの向上に最大限利用できること。

民間企業

- ◎ライティング指導(学習)におけるAI活用は、やはりもっと進めていくべきなのかなという感覚を持つことができた。
- ◎学び方を学ぶ機会としての生成AIの活用と、その機会における教師のフィードバックの重要性。金森先生の「Chat GPTくん」という表現はとても分かりやすかったです。

SEMINAR REPORT 2024

〈概要〉

研究理事 (五十音順) 和泉 伸一 (上智大学)
金森 強 (文教大学)
工藤 洋路 (玉川大学)
酒井 英樹 (信州大学)
長沼 君主 (東海大学)
根岸 雅史 (東京外国語大学) * 研究代表理事

研究員 加藤 由美子 (ベネッセ教育総合研究所)
福本 優美子 (ベネッセ教育総合研究所)
森下 みゆき (ベネッセ教育総合研究所)

正式名称 Action Research Center for Language Education (ARCLE/アークル)
*ARCLEはベネッセ教育総合研究所が運営する英語教育研究会です。

事務局 〒206-8686 東京都多摩市落合1-34 ベネッセ教育総合研究所 内

ベネッセ英語教育オンラインセミナー報告書 2024年5月発行

企画・発行: Action Research Center for Language Education (ARCLE/アークル)

編集協力: 水田真貴

デザイン: MONDO graphic